

紀要

土偶装飾付土器の根本的性質と展開過程.....	瀬口 眞司 (1)
栗太郡の白鳳寺院研究史	宮村 誠二 (19)
蜂屋遺跡出土軒瓦を考える	福井 知樹 (24)
天武朝期における野洲地域出土須恵器の法量分化について —西河原森ノ内遺跡北半包含層を中心として—	遠藤あゆむ (28)
中世成立期の民衆の思想と信仰 —塩津起請文と卒塔婆から—	濱 修 (37)
中世集落における巻数板のあり方について —考古資料の検討から—	木下 義信 (46)
将棋史研究ノート10-2 —日本における博打と将棋の関わり その2—	三宅 弘 (53)
滋賀県行政文書で見る「近江の考古学黎明期」	田井中洋介 (63)
未就学児と歴史系ワークショップについての予察 ...	鈴木 康二 (76)

33

栗太郡の白鳳寺院研究史

宮 村 誠 二

1. はじめに

滋賀県栗東市蜂屋地先に所在する蜂屋遺跡は、縄文時代から近世にかけての集落遺跡として周知されている。

一方、遺跡の範囲内には、寺院に関わる小字名が散見され、地元には、奈良時代の創建とされる「蜂屋寺」の伝承が残る。これまでに実施された発掘調査でも白鳳期の瓦片が出土しており（栗東市教委・栗東市体協 2012）、寺院跡の存在が推測されてきた。

当遺跡では、2018 年度に公益財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した発掘調査において、「宗寺」の小字名がある地区の西端部で正南北方向を指向する 4 条の溝が検出され、溝の中やその周辺から白鳳期の瓦が多数出土した。堂塔の遺構こそ確認されなかったものの、瓦の出土状況や出土量からみて、付近における寺院跡の存在が確実視される。

この寺院は、出土した軒瓦の大半が法隆寺式軒瓦であり、奈良県生駒郡斑鳩町の法隆寺若草伽藍跡出土資料や中宮寺跡出土資料と同範の忍冬文軒丸瓦も出土していることから、法隆寺と深い関わりを持っていたことが推測され（滋文保協 2018、宮村・福井 2019）（1）、斑鳩の瓦工人の動向を考えるうえでも注目されている（平田 2019）。

調査成果の位置づけは、今後検討を重ねて煮詰めていくつもりだが、本稿では、そのための第一歩として栗太郡における白鳳寺院研究の現状と課題を把握し、研究の方向性を探るべく、研究のあゆみを振り返り、研究史上の主な論点とそれにかかる研究課題を抽出する（2）。

2. 栗太郡における白鳳寺院研究のあゆみ

栗太郡の白鳳寺院研究は、1926 年に刊行された『近江栗太郡志』の編纂事業にかかる資料収集を端緒とする。同書巻五には、栗太郡の寺院志がまとめられており、古代寺院跡についても詳細な当時の知見が記されている（滋賀県栗太郡役所 1926）。

その後、1950 年には、梅原末治氏が 1889 年に栗太郡常盤村志那中で採集された忍冬文軒丸瓦の破片を法隆寺出土資料と比較検討し、同範の可能性を指摘した（梅原 1950）。

こうして早い時期に栗太郡の古代寺院跡にかかる情報が周知され、瓦を通して大和の大寺院との関係性が見出されたことは、栗太郡の白鳳寺院にかかる先駆的な研究成果として注目される。

とはいえ、これら以外に目立った研究はなく、栗太郡の白鳳寺院研究が本格的に行われるようになるのは、発掘調査成果が蓄積されつつあった 1980 年代以降のことである。

1981 年、丸山竜平・田中日佐夫両氏は『草津市史』のなかで草津市域の白鳳寺院について考古資料・文献資料を駆使して多角的に論じた。両氏は栗太郡に多くの白鳳寺院跡があり、とくに草津市北部に密集することを指摘したうえで、「これら多数の白鳳寺院はいつごろ、誰によって何を目的に建立されたのであろうか。これは寺院跡の存在を考えるうえで、最も興味ある問題の一つである」（丸山・田中 1981、p 295）とし、草津市域の白鳳寺院を残存地割や出土瓦の特徴、礎石等に着眼して検討した。両氏の研究は、栗太郡の古代寺院跡にかかる多くの問題を提起しており、その分析視覚にも学ぶべき点が多い。しかし、両氏が最も興味ある問題の一つとした「一地域になぜこれだけ多くの寺院が建立されたのかはいまのところ明らかにすることはできない」（丸山・田中 1981、p 311）としている。

その後、同様の問題意識に基づき、草津市域の古代寺院跡に検討を加えたのが藤居朗氏である（藤居 1986）。

藤居氏は、まず寺院の立地を検討し、それらがかつての琵琶湖岸に面して造営されたことを指摘した。次いで、自身も発掘調査を担当した草津市宝光寺跡の調査成果—とくに出土瓦の特徴—から湖岸の白鳳寺院と大津京との密接な関係を推測し、大津京周辺寺院と草津市域の寺院との関係を立地に着眼して検討した。そして、草津市域の寺院造営の契機が大津京遷都にあることを推測し、草津市域の湖岸に多くの白鳳寺院がつくられた理由として大津京の防衛と大津京周辺の地形が起伏にとみ、狭長であったため、大津京造営に関わった氏族たちが対岸に氏寺の造営地を求めた可能性を想定した。

1980 年代には、こうした草津市域の白鳳寺院跡を対象とした研究が進められるとともに、個々の寺院跡の検討も行われた。1987 年、小笠原好彦氏は、宝光寺跡の発掘調査報告書のなかで、宝光寺跡の伽藍と寺域、宝光寺跡の造営時期と廃絶時期、宝光寺跡の造営氏族と性格について検討した（小笠原 1987a・1987b・1987c）。このなかでとくに注目されるのは、宝光寺跡の造営氏族と性格についての検討結果である。氏は、輻線文縁軒丸瓦が渡来系氏族と関わりの深い寺院で用いられたとする山崎信二氏の研究成果（山崎 1983）を引用し、この軒丸瓦が出土した栗太郡の宝光寺跡や手原廃寺も同様の性格をもつ可能性が高いとした（小笠原 1987c）。

1989 年には、小笠原好彦・田中勝弘・西田弘・林博通の各氏により『近江の古代寺院』が刊行された（小笠原ほか 1989）。同書では、近江の古代寺院研究史が整理され、多

くの課題が抽出された。また、近江での寺院跡の分布や伽藍、基壇、寺域などにも検討が加えられ、個々の寺院跡についても遺構や出土瓦の様相が示され、その性格や造営氏族などが考察された。西田弘氏による手原廃寺の記述では、法隆寺式軒瓦をめぐって問題提起がなされており、今回の蜂屋遺跡の調査成果との関係でも注目される（西田 1989）。

同書は、近江の古代寺院にかかるそれまでの調査研究の成果を総括したもので、近江の古代寺院全般を対象とした研究がそれ以前にはなかったことから、画期的な研究成果といえる。近江の古代寺院の基礎資料が一書にまとめられたことにより、近江の古代寺院の動態を容易に把握できるようになった意義は大きく、同書は今日においても近江の古代寺院研究の基本文献として重要な位置を占めている。

1990年代には、松村浩・畑本陽子両氏による栗東市域出土の古代瓦の資料紹介（松村・畑本 1996）や小笠原氏による輻線文縁軒丸瓦の再論（小笠原 1997）、藤居氏による草津市北部の古代寺院跡の再検討（藤居 1997）があるほか、小笠原氏による瓦積基壇の研究がある（小笠原 1996）。小笠原氏は近江・山背・大和・河内の瓦積基壇を形式分類し、採用過程や系譜、採用寺院の性格を検討し、瓦積基壇が近江朝の時期に渡来系氏族によって最新の外装様式として積極的に取り入れられていったほか、その周辺寺院でも渡来系氏族の寺院と関連をもって採用されたことを明らかにした。出土瓦だけでなく、遺構についても渡来系氏族との関わりが指摘されたことは注目される。

2000年代には、草津市域の古代寺院跡の再検討や寺院造営と官衙整備・生産遺跡との関係が追求された。

別所健二氏は、かつて丸山・田中両氏や藤居氏が検討した草津市域の古代寺院跡について、その後の発掘調査成果などに基づき、瓦の出土量や出土状況、遺存する礎石等の石造物のあり方、地割痕跡に着目して再検討した（別所 2007）。

その結果、草津市域の古代寺院には、遺構・遺物のあり方から存在が確実視できるものと造営事実が大きく否定的とならざるを得ない状況にあるものがあり、これまで10ヶ寺と考えられていた寺院数が半減する可能性を示唆した（3）。そのうえで、これらの寺院の造営背景を考察し、大津宮東方の防御的機能の確立のために琵琶湖東岸の水陸の要衝に建立されたと推定することも可能であり、王権と密接な官営的性格を有した寺院と草津市北部に勢力を有した古代氏族の氏寺がともに草津市北部に造営されたため、当該地域での寺院の濃密な分布状況が生じた可能性を指摘した。

一方、藤居朗氏は、近江南部の滋賀郡・栗太郡を対象に寺院造営・官衙整備と瓦生産、鉄生産、須恵器生産などの熱利用の生産遺跡との関わりを検討した（藤居 2007）。藤居氏は、当該地域の寺院・官衙の整備および生産活動には、大津宮遷都を契機として開始または本格化される例が多い

ことを指摘し、生産遺跡の増加の背景に寺院・官衙等の造営数の増大化があったことを想定した。また、生産遺跡にみられる技術的特徴から、こうした生産活動に渡来人の関与があった可能性を推測した。この研究は、当該地域の寺院造営を地域の生産活動との関係の中で捉えようとした視野の広いものであり高く評価できよう。

なお、2000年代以降の動向として注目されるのが栗東市域での小平井廃寺と下鉤東遺跡の寺院跡の発見および、その調査成果の蓄積であり、これを受けて、それまであまり検討されることのなかった栗東市域の古代寺院跡の研究も活発におこなわれるようになった。両寺院跡をめぐっては、佐伯英樹氏が小平井廃寺を「栗太寺」に比定し（佐伯 2007）、下鉤東遺跡の寺院跡については、大字名から「蜂屋廃寺」の名称を提唱している（佐伯 2012）。ただし、後者については当該遺跡の発掘調査報告書のなかで慎重な意見も示されている（藤岡 2011）。報告者の藤岡英礼氏は、当該寺院跡を蜂屋寺とは別の寺院遺跡と捉えている。

雨森智美氏は、栗太郡における白鳳寺院の成立と展開について検討した（雨森 2013）。雨森氏は、まず栗東市の蜂屋赤子塚廃寺と手原廃寺の発掘調査成果にもとづき、各遺構の動態や寺院の存続期間などを明らかにした。そして、下鉤東遺跡や手原遺跡に加え、これらと隣接し、連動した動きをみせる野尻遺跡と蜂屋遺跡を一連の遺跡群としてとらえ、その動態を検討した。その結果、当該遺跡群では、7世紀前半に開発がはじまり、掘立柱建物による集落がいくつかのまとまりをもって形成されていたこと、7世紀後半にはこれらの集落を母体として寺院が造営されることを明らかにした。また、寺院の展開過程について、蜂屋赤子塚廃寺と手原廃寺では異なる推移がみられることを指摘し、その要因として「寺院併合令」との関係や官衙や官道との関係性を想定した。

その後、雨森氏は栗太郡の白鳳寺院の動向をさらに検討し、栗太郡の内陸部に位置する寺院に笠寺廃寺を軸とするまとまりと、手原廃寺を軸とするまとまりがある可能性を指摘した（雨森 2016）。

雨森氏は、前者の造営・維持の背景には7世紀後半以降の瀬田丘陵における生産をささえた集団とその技術を担った渡来系の集団の存在を想定し、後者の造営氏族については旧来より栗太郡に居住していた渡来系氏族もしくはその関連する氏族との関わりが考えられるとした。造営氏族や造営基盤の違いに言及しており、注目される。

このほか、当該地域の古代寺院に関するものとして梶原義実氏による近江の寺院選地に関する研究がある（梶原 2018）。梶原氏は、このなかで栗太郡の古代寺院についても検討しており、琵琶湖岸沿いや東山道に面した場所を選地して多くの寺院が造営されている状況から、湖上交通や陸上交通の要衝に選地される傾向があることを見出し、とくに草津市域の琵琶湖岸沿いに集中して造営された寺院に

ついて、湖上交通の要衝を選地し、湖上を行き交う船からの視点を強く意識したものである可能性を指摘した。なお、これら寺院の造営主体については、それぞれが異なる軒瓦を採用していることから、単一の造営主体とは考えにくいとし、宝光寺跡出土瓦の存在から、対岸の大津北郊地域に膨大な群集墳を築いた氏族たちを中心に、湖を挟んだ水運の要衝であるこの地をそれぞれ好適地として選地し、寺院を造営していった可能性に言及している。

一方、この時期には、竹内英昭氏や北村圭弘氏、小谷徳彦氏により出土瓦の検討も意欲的に進められた。

竹内氏は、伊賀と近江の法隆寺式軒瓦を概観し、両地域の面違鋸歯文をもつ資料に類似したものがあることや伊賀の殿山瓦窯跡と近江の樋ノ口瓦窯跡とのあいだで軒平瓦に同範の可能性があることなどを指摘した（竹内 2009）。

この竹内氏の研究に大いに刺激を受けた北村氏は、近江の法隆寺式軒瓦の系譜や年代を考察した（北村 2006）。氏は資料をより詳細に検討し、瓦当文様の系列やその伝播年代が一樣でないことを明らかにした。また、法隆寺式軒瓦の分布と法隆寺の庄倉の分布との対応関係にもとづき、法隆寺式軒瓦の伝播と庄倉経営との関係を説いた鬼頭清明氏の学説（鬼頭 1977）を近江の資料に即して批判的に検討し、近江では、法隆寺式軒瓦の分布と法隆寺の庄倉の分布との一致率がさほど高くなく、鬼頭氏が主張するほど両者の緊密性を積極的に支持できる状況にないことを指摘した。

なお、北村氏は、その理由が瓦当文様の系列や伝播年代が一樣でないことにある可能性を指摘し、「法隆寺式軒瓦の伝播背景については、こうした基礎的な事実を明らかにしたうえで、あらためて議論する必要がある」（北村 2006、p 33）とした。

北村氏は、栗太郡を含む琵琶湖東岸域の川原寺式軒瓦についても分類して、各類型の分布状況や系譜を検討した（北村 2009）。

その後、栗東市域の川原寺式軒瓦をより詳細に検討したのが小谷氏である。氏は下鉤東遺跡と手原廃寺の川原寺式軒丸瓦が同範であることを突き止め、それらを中心とした栗東市域出土資料の分析から、栗東市域の川原寺式軒瓦が山田窯を中心として分布している可能性を指摘した（小谷 2013）。それまで明瞭でなかった栗太郡での瓦の生産・供給関係の一端を同範軒瓦の分析をもとにあとづけたことは、寺院間の関係を考えるうえでも重要な成果であり、高く評価できよう。

このほか瓦窯を対象とした藤居氏の研究がある（藤居 2015）。藤居氏は草津市笠寺廃寺の推定寺域西端から西へ約 80m の地点で検出された瓦窯（笠寺廃寺瓦窯）について出土瓦を検討し、これが近接する笠寺廃寺に関連することを指摘した。そのうえで、笠寺廃寺では、瓦や仏事に用いる金属製品を生産するための専用施設を独自に整備し、関連する工人を配置していたことを想定した。

また、草津市北部と南部での寺院のあり方の違いについて、笠寺廃寺は官道上の交通の要衝に位置するのに対して北部の寺院は大津宮造営を契機にその周辺寺院の造営氏族と深い関わりを持ちながら創建された可能性が高いとする。

笠寺廃寺については大津宮の造営に関わった氏族などからの直接の影響を受けていない在地勢力が造営したと考えた。そして、笠寺廃寺において独自の寺院整備が可能であった背景として、笠寺廃寺を拠点とする有力氏族が当時、近江で活発に行われた官衙や寺院等の整備のための物資流通ルートである東山道に面し、交通の要衝を掌握していたため、瓦生産の技術や鑄造技術を持った工人を集めることができたことを想定した。

以上、栗太郡の白鳳寺院研究のあゆみを振り返った。研究の大きな流れとして、当初から取り組まれてきた寺院跡の検討や出土瓦の分析に加え、近年は周辺集落や官衙、官道、生産遺跡との関係性を検討する中から、個々の寺院跡の特色を見出し、その性格に迫ろうとする研究がみられるようになってきたことが理解できたと思う。次章では、先行研究における主な論点をとりあげ、各論点にかかる研究課題を抽出してみたい。

3. 先行研究における主な論点と今後の課題

【論点 1】草津市北部における古代寺院跡密集の背景

1981 年の『草津市史』以来、注目されてきた問題であり、藤居氏と別所氏により寺院の造営理由に関して意見が示されている。藤居氏は、草津市域の湖岸に多くの白鳳寺院がつくられた理由として、大津京の防衛と大津の地形的制約により大津京造営に関わった氏族たちが対岸に氏寺の造営地を求めたことを想定した（藤居 1986）。

一方、別所氏は、大津宮東方の防衛的機能確立のために琵琶湖東岸の水陸の要衝に寺院が建立されたと推定し、王権と密接な官営的性格を有した寺院と草津市北部に勢力を有した古代氏族の氏寺がともに草津市北部に造営されたため、当該地域での寺院の濃密な分布状況が生じた可能性を考えた（別所 2007）。

両氏とも寺院の造営目的として大津宮の防衛という軍事的側面を想定しているが、古代寺院に軍事的機能をどこまで想定できるかは未解決の問題であり、今後資料に即して検討していく必要がある。

なお、栗太郡での古代寺院の密集をめぐる近年の状況として注目されるのが下鉤東遺跡と蜂屋遺跡での寺院跡の発見により、草津市北部の湖岸部以外に栗東市北部にも古代寺院の密集地域が存在することが明らかになったことである。草津市北部は湖上交通、栗東市北部は陸上交通の要衝に位置しているとも考えられ、古代寺院と交通路との関係は、栗太郡での古代寺院密集の背景を考えるうえで、今後重要なポイントとなるだろう。

【論点 2】白鳳寺院の性格と造営氏族

栗太郡の白鳳寺院の性格や造営氏族を考察する際に、先行研究においてとくに注目されてきたのが輻線文縁軒丸瓦であり、これまでも渡来系氏族との関係が強調されてきたし、それが半ば定説化している（小笠原 1987c・1997）。

しかしながら、輻線文縁軒丸瓦は、渡来系氏族との関わりが指摘される寺院跡においてもごく少量しか出土せず、軒瓦の主体を占めるものではない。少量の軒瓦が何を意味するかは未解決の問題であり、それが造営氏族の性格をどれだけ反映しているかも不明である。「定説」に囚われすぎず、今後も議論を重ね、さまざまな可能性を探っていく必要がある。ちなみに蜂屋遺跡では、絶対多数を占める法隆寺式軒瓦以外に、忍冬文軒丸瓦や輻線文縁軒丸瓦、素弁蓮華文軒丸瓦がそれぞれ少数確認されている。寺院の性格や造営氏族に迫るためにもこれらの瓦をトータルに評価していくことが肝要であろう。

【論点 3】古代寺院の消長とその評価

栗太郡の古代寺院には出土瓦の様相から、長期的に維持されたと考えられるものとごく短期間で廃絶したと考えられるものが認められる。その評価をめぐるのは、寺院併合令との関係が想定されることも多い。とはいえ、寺院併合令の効力の大小や実態はいまだ不明瞭であり、今後は長期的に維持される寺院と短期間で廃絶する寺院の違い、そこに反映された寺院造営氏族の実態を、地域内の動向把握や他地域との比較検討を通して明らかにしていく必要があるだろう。

【論点 4】寺院間関係

栗太郡の寺院間関係では、栗太郡内陸部の寺院に笠寺廃寺を軸とするまとまりと手原廃寺を軸とするまとまりがある可能性を指摘し、造営氏族や造営基盤にまで言及した雨森氏の研究（雨森 2016）が注目されるが、この研究では、従来別個に論じられることの多かった草津市域と栗東市域の寺院跡を合わせて検討したことで、重要な成果が生まれた。

今後、栗太郡の寺院間関係を考えていくうえでは、内陸部の寺院と琵琶湖岸沿いの寺院との関係なども検討していく必要があるが、志那中で採集され、法隆寺出土資料と同範の可能性が指摘される忍冬文軒丸瓦と蜂屋遺跡出土の忍冬文軒丸瓦は、内陸部の寺院と湖岸沿いの寺院との接点となりうるきわめて重要な資料である。まずは、両者の同範関係の有無が明らかにされることが望まれる。

また、蜂屋遺跡の調査成果は、当該地域と中央の大寺院である法隆寺との関係を強く意識させるものである。今後、法隆寺式軒瓦を通して栗太郡内のほかの寺院や他地域の寺院との関係を追及していくことで、法隆寺との関係がより具体的に見えてくると思われる。

【論点 5】寺院と集落や宮都、官衙、生産遺跡との関係

2000 年代以降の研究動向として、寺院跡自体の検討以外に周辺に所在する同時期の集落や宮都、官衙、生産遺跡の動向を検討し、それらと寺院跡との関係性を追求することで寺院跡にアプローチしようとする研究が目立つようになってきたことが指摘できる。こうした動向は、いまだ資料的制約が大きく、寺院跡の実態を十分把握できないというネガティブな側面にも起因するのであろうが、むしろ、発掘調査の進展によって寺院跡を取り巻く周辺環境が徐々にではあるが明らかになってきたというポジティブな側面に寺院研究の新たな可能性が見出されたことによるものと思われる。

蜂屋遺跡の歴史的評価においては、法隆寺の庄倉経営との関係が重要な検討課題となるが、従来、資料的制約のためアプローチが困難であったこうした課題にもこれまで以上にアプローチできる環境が整いつつある。法隆寺式軒瓦との関係が指摘される山部（菱田 2006）との関係性なども具体的に見えてくる可能性があり、今後も研究の進展が期待される寺院研究の重要な論点といえよう。

4. おわりに

本稿では、蜂屋遺跡の調査成果を地域の歴史や日本の歴史の中で位置づけるための第一歩として、栗太郡の白鳳寺院研究の現状と課題を把握するべく、研究のあゆみを振り返り、主な論点とそれにかかる研究課題を整理した。

栗太郡の白鳳寺院をめぐるのは、大正期以来、昭和、平成と、長きにわたって先学による精力的かつ地道な調査・研究活動が継続され、実り多い研究成果が蓄積されてきた。

しかしながら、令和となった今日においても当該地域の白鳳寺院には不明な点が多く、こうした状況下では、個々の寺院跡の検討からだけではアプローチしがたい課題も多い。蜂屋遺跡の寺院跡の評価にあたっては、他地域の寺院跡や同時期の周辺集落、宮都、官衙、生産遺跡、交通路など、他との関係性のなかで寺院をとらえていく視点が求められよう。

今回の蜂屋遺跡の調査成果は、研究史上の多くの論点の解明に寄与する可能性があり、今後の栗太郡の白鳳寺院研究を大きく前進させることが予想される。本稿がその一助となれば望外の喜びである。

註

(1) なお、蜂屋遺跡では、並行する 2 条の沈線の間にスタンプ施文の連珠文をあらわした文様帯 2 条 1 組で区画された縦帯をもつ鴟尾片が出土しているが（宮村・福井 2019）、これとの関係で注目されるのが法隆寺の大講堂修理工事で発見された鴟尾の断片である。法隆寺例は断面方形の幅の狭い突帯 2 条を等間隔に配して縦帯としており、突帯上にコンパス施文の連珠文をあらわし、一部に墨線で唐草文が施されている（飛鳥資料館 1980）。

施文方法や表現に違いはあるものの、文様構成には共通点もあり、関係性が注目される。

- (2) 栗太郡をはじめ、近江の古代寺院研究史については、小笠原好彦氏が 1980 年代後半までの研究成果を的確に整理しており、大いに参考になる（小笠原 1989）。しかしながら、氏による整理では、栗太郡の古代寺院の発掘調査成果には触れられているものの、研究論文にはほとんど言及されていない。栗太郡の白鳳寺院については、小笠原氏の整理以降に多くの研究論文が発表されており、研究史もいっそう厚みを増している。それゆえ、本稿では研究論文として発表されたものを中心に研究成果を整理することとしたい。
- (3) 別所氏は存在が確定的と考えられるものとして、花摘寺廃寺、観音堂廃寺、宝光寺跡、笠寺廃寺の 4 ケ寺を挙げている（別所 2007）。

文献（著者名・機関名 50 音順、刊行年順）

- 飛鳥資料館（1980）『日本古代の鷗尾』飛鳥資料館図録第 7 冊
- 雨森智美（2013）「白鳳寺院の成立と展開～栗太郡の事例から～」『栗東歴史民俗博物館紀要』第 19 号、栗東歴史民俗博物館
- 雨森智美（2016）「研究ノート栗太郡の白鳳寺院について」『栗東歴史民俗博物館紀要』第 22 号、栗東歴史民俗博物館
- 梅原末治（1950）「忍冬様文軒丸瓦に就いて」『史迹美術』20-8、史迹美術同友会
- 小笠原好彦（1987a）「1. 宝光寺跡の伽藍と寺域」『宝光寺跡発掘調査報告書』草津市文化財調査報告書 12
- 小笠原好彦（1987b）「2. 宝光寺跡の造営時期と廃絶時期」『宝光寺跡発掘調査報告書』草津市文化財調査報告書 12
- 小笠原好彦（1987c）「3. 宝光寺跡の造営氏族と性格」『宝光寺跡発掘調査報告書』草津市文化財調査報告書 12
- 小笠原好彦（1989）「近江古代寺院の研究史」『近江の古代寺院』、真陽社
- 小笠原好彦（1996）「瓦積基壇考—近江・山背・大和・河内—」『畑中誠治教授退官記念論集近江歴史・考古論集』、畑中誠治教授退官記念会
- 小笠原好彦（1997）「近江の渡来系氏族の古墳と軒瓦」『季刊考古学』第 60 号、雄山閣出版
- 小笠原好彦・田中勝弘・西田弘・林博通（1989）『近江の古代寺院』、真陽社
- 梶原義実（2018）『古代地方寺院の造営と景観』、吉川弘文館
- 北村圭弘（2006）「近江の法隆寺式軒瓦」『紀要』第 19 号、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 北村圭弘（2009）「琵琶湖東岸域の川原寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅲ—川原寺式軒瓦の成立と展開—』、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 鬼頭清明（1977）「法隆寺の庄倉と軒瓦の分布」『古代研究』第 11 号、元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室
- 小谷徳彦（2013）「栗太郡における川原寺式軒瓦の一樣相～下鉤東遺跡と手原廃寺の同範軒丸瓦を中心に～」『栗東歴史民俗博物館紀要』第 19 号、栗東歴史民俗博物館
- 佐伯英樹（2007）「栗太評衡と栗太寺」『考古学論究—小笠原好彦先生退任記念論集—』、真陽社
- 佐伯英樹（2012）「栗太郡物部郷「蜂屋寺」の伝承と白鳳寺院」『淡海文化財論叢』第 4 輯、淡海文化財論叢刊行会
- 滋賀県文化財保護協会（2018）『蜂屋遺跡現地説明会資料』
- 滋賀県栗太郡役所（1926）『近江栗太郡志』巻五
- 竹内英昭（2009）「伊賀・近江の法隆寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅳ—法隆寺式軒瓦の成立と展開—』雷文縁・幅線文縁・重圈文縁複弁蓮華文軒丸瓦の展開—』、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 西田弘（1989）「手原廃寺」『近江の古代寺院』、真陽社
- 菱田哲郎（2006）「東播磨の古代寺院と氏族伝承」『喜谷美宣先生古稀記念論集』、喜谷美宣先生古稀記念論集刊行会
- 平田政彦（2019）「単弁忍冬文装飾六弁蓮華文軒丸瓦からみた飛鳥時代の斑鳩における瓦工人の動向についての予察—蜂屋遺跡の発掘調査成果に関連して—」『斑鳩文化財センター年報』第 8 号（平成 29 年度）、斑鳩町教育委員会・斑鳩町文化財活用センター
- 藤居朗（1986）「草津の古代寺院」『滋賀史学会誌』第 5 号、滋賀史学会
- 藤居朗（1987）「4. 宝光寺跡出土瓦について」『宝光寺跡発掘調査報告書』草津市文化財調査報告書 12
- 藤居朗（1997）「近江における古代寺院の出現とその背景」『古代寺院の出現とその背景』、埋蔵文化財研究会・第 42 回研究集会実行委員会
- 藤居朗（2007）「近江南部における古代寺院・官衙の整備と生産活動」『考古学論究—小笠原好彦先生退任記念論集—』、真陽社
- 藤居朗（2015）「草津市笠寺廃寺瓦窯について」『淡海文化財論叢』第 7 輯
- 藤岡英礼（2011）「今後の注意点」『下鉤東遺跡発掘調査報告書』、栗東市教育委員会・財団法人栗東市文化体育振興事業団
- 別所健二（2007）「草津の古代寺院址再考」『考古学論究—小笠原好彦先生退任記念論集—』、真陽社
- 松村浩・畑本陽子（1996）「〈資料紹介〉栗東町出土の古代軒瓦」『栗東歴史民俗博物館紀要』第 2 号、栗東歴史民俗博物館
- 丸山竜平・田中日佐夫（1981）「第三節白鳳廃寺」『草津市史』第 1 巻、草津市役所
- 宮村誠二・福井知樹（2019）「滋賀県栗東市蜂屋遺跡の発掘調査」『古代文化』第 71 巻第 2 号、公益財団法人古代学協会
- 山崎信二（1983）「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」『奈良国立文化財研究所創立 30 周年記念論集文化財論叢』、同朋社（山崎信二（2003）『古代瓦と横穴式石室の研究』、同成社に再録）
- 栗東市教育委員会・財団法人栗東市体育協会 2012『蜂屋遺跡平成 23 年度 1 次調査』栗東市文化財調査報告書第 56 冊

（みやむら せいじ：調査課 主任技師）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.33 2020.3

私たちは文化財をととして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages